

吉本の興行〈戦略〉——創業から大合同までを中心に——

宮 信明（早稲田大学演劇博物館 招聘研究員）

【要旨】

2020年2月29日、吉本興業は新型コロナウイルスの感染拡大状況等に鑑み、直営劇場公演及び主催興行、イベントについて、3月2日から全ての公演を中止または延期すると発表した。この決定に驚かされた演芸関係者は少なくなかっただろう。まさかあの吉本がこんなにも早く興行の中止、延期を発表するとは、と。しかし一方で、時代の空気を的確に読み解き、大衆の期待に応え続けてきた、まさに吉本らしい英断であったと見る向きも、また少なくなかったのではないだろうか。

大阪市南区と東区で荒物商「箸吉」を営んでいた五代目吉本吉兵衛（本名吉次郎、通名泰三）・せい夫妻が、天満天神裏近くの寄席・第二文芸館を300円で買収し、寄席経営に乗り出したのが、1912年（明治45年）4月1日とされる。建坪48坪という中規模の寄席小屋であった。その後、上福島の龍虎館、松島の芦辺館などを手に入れ、1915年には法善寺裏にあった一流の寄席・蓬萊館（旧金沢亭）を13000円で買収し、花月亭（のち南地花月亭）と改称している。1921年には、爆笑王・初代桂春団治と専属契約を結ぶとともに、東京神田の川竹亭を手中にし、神田花月と改め東京に進出。1922年には法善寺の紅梅亭を買収、吉本興行部が他派を合併するかたちで、関西の寄席演芸界の大合同が行われた。寄席経営の開始からわずか10年、41軒の寄席を傘下に収め、演芸王国吉本の礎が築かれた瞬間であった。まさに時代の空気を的確に読み解き、大衆の期待に応えた結果といえよう。

本稿では、1912年の創業から1922年の「花月派三友派大合同」までの10年間を中心に、当時の演芸界の動向や社会の風潮、さらに人口変動や都市拡張による生活空間の変化などにも目を配りつつ、吉本がいかんにして演芸王国の基礎を確立するに至ったのか、その興行〈戦略〉について考察する。

キーワード：吉本興業、寄席、大阪、大衆、笑い

はじめに

吉本泰三・せい夫妻が寄席興行の世界へと足を踏み入れたのは、まさに変革・変動の時代であった。明治期後半から大正期、なかでも第一次世界大戦を契機として、大阪という街は商業都市から商工業都市へと変貌を遂げ、都市としての性格を大きく変えつつあった。農民が都市の労働力として大量に流入することで、大阪市及びその周辺地域の人口が増加、市街地が拡大していくなかで、娯楽にも大きな変化が求められていたのである。

まずは、そこに至るまでの演芸史を駆け足で振り返っておこう。

吉本が参入した大正時代の落語界は諸派乱立の様相を呈していた。その端緒となったのが、1874年（明治7年）の初代桂文枝の死である。幕末から明治初期にかけて活躍した初代文枝の門下には、初代文三、初代文団治、二代目文都、初代文之助の四天王と呼ばれる弟子たちがいた。師の歿後、二代目文枝の襲名争いが起こり、師匠の遺言もあって文三が二代目を継いだものの、それを不服とした文都は亭号を月亭と改め、初代文枝の本拠地であった南地法善寺の泉熊席（後の紅梅亭）を手中に収める。これに対抗して、二代目文枝はその東隣の金沢亭（後の蓬萊館）を「桂派」の拠点にすることとなった。さらに、1893年には、北堀江の賑江亭の席亭であった藤原重助が音頭取りとなって、文都、初代笑福亭福松、二代目文団治の三人が「浪花三友派」を結成、後には二代目曾呂利新左衛門（初代文之助）や三代目笑福亭松鶴らも加わっている。二代目桂三木助によれば「桂派の方はジミで、踊や唄はやかましく云はず嘶一方に力を注いだが、三友派は反対に嘶よりは踊や唄に重きを置いてハデー方だっただけに、大衆向きであった」¹という。

明治時代の上方落語界は、30年代に桂派から「藤明派」が分かれ、その残党が「互楽派」を作るなど、いくつかの分派がみられたものの、基本的には明治末まで桂・三友の二派体制が保たれ、この二派が競い合うことによって最盛期を迎えることとなった。色物を交えず、静かで枯淡な味わいの桂派に対して、音曲や手品などを加え、賑やかで派手な演出の三友派は、当初は劣勢であったものの、次第に桂派を凌ぐようになっていったという。ところが、1900年4月に文都が他界すると、1904年10月には福松が亡くなり、その上、三友派の後ろ楯であった藤原重助も1906年11月にこの世を去っている。一方、桂派でも1908年に文左衛門（二代目文枝）が引退、1910年には三代目文枝が47歳の若さで師匠の文左衛門に先立っている。明治40年代に入ると、桂・三友両派は歩み寄りを見せ、合同興行も催されるようになったが、「名人は凋落する、人の好みはようやく落語界を離れる、おまけに見物料が高いので、自然浪花節や活動写真に圧倒される」²と報じられ、両派の退勢は誰の目にも明らかであった。こうした状況のなかで、演芸界に新風を吹き込んだのが岡田政太郎である。

大正期から昭和中期にかけて活躍した珍芸漫談家の花月亭九里丸編『寄席楽屋事典』³によれば、岡田は枚岡（現・東大阪市）から大阪へ出て、玉造で風呂屋を営み、「風呂

¹ 桂三木助「私の自叙傳（一）」（『ヨシモト』創刊号、1935年8月）。

² 「三友派の末路 大阪落語界の近況」（『大阪朝日新聞』1912年3月23日付）。

³ 花月亭九里丸『寄席楽屋事典』（渡辺力蔵、1960年）。針小棒大に物事を吹聴する九里丸のことゆえ、

政」とも、色が黒いので「黒政」とも、あだ名されたという。1911年⁴、株で大儲けした資金を元手に、上本町の梯亭という講釈の席を手に入れた岡田は、富貴と名を改め、新内と三友派から借り入れた落語家の合併で開場した。「なんでも構わぬ、上手も下手もない、銭が安うて、無条件に楽しませる演芸」を看板に、入場料を通常の3分の1程度にまで値下げし、軽口や新内、音曲、踊り、剣舞、琵琶、奇術などの色物沢山の興行で大成功を収めた。やがて席専属の芸人を持つようになり⁵、「反対派」を旗揚げして、三友派を凌ぐ勢いで発展していく。

新たな勢力の侵攻に対して、桂派は為す術がなかった。1911年に桂仁左衛門が没すると、以後つるべ落としのように力を失い、1912年には事実上瓦解、残党が四代目笑福亭松鶴、四代目金原亭馬生など三友派の一部と組み、「寿々女会」を組織して再出発をはかるが、これも3年ほどで解散、三友派に吸収されて、桂派は名実ともに消滅した。また、三友派は1910年に当時会長であった曾呂利新左衛門が引退するなど、これも往時の勢いは失っていたが、それでもなお桂派の一部を受け入れ、色物なども加えて、どうにか反対派に対抗していた。ところが、組織というものは危機的な状況になればなるほど、バラバラになっていくものなのだろうか。1912年（大正元年）11月20日の『大阪毎日新聞』に掲載された「落語界の戦国策 三友柱両派合同す」という記事によれば、三友派は紅梅亭の「三友派」と、賑江亭、此花館の「大正派」に分裂、寿々女会の初代桂枝雀は大正派へ、二代目三遊亭円馬、二代目桂小文枝らは三友派へ移っていったという。さらに、1916年には大正派が解散、枝雀はただちに「新桂派」を結成したが、これも2年と続かなかった。また、大正派が解散した1916年には、宮崎八十八という易者が、活動弁士出身の大山孝之とともに「大八会」を組織している。反対派に対抗するかのよう、千日前の三友倶楽部や楽天地の朝陽殿で、曲芸や長唄、新内、義太夫、女道楽、女講談、軽口、万歳、踊、剣舞など色物沢山の、低価格の興行で人気を集めた。

このように、「浪花三友派」「反対派」「寿々女会」「大正派」「新桂派」「大八会」など、さまざまな会派ができては潰れ、合同分裂を繰り返しながら諸派が入り乱れるなか、吉本泰三・せい夫妻は演芸の世界へと参入することとなったのである。

以下、本稿では1912年の創業から1922年の「花月派三友派大合同」までの10年間を中心に、吉本がいかにして演芸王国の基礎を確立するに至ったのか、その興行〈戦略〉について、1. 寄席、2. 芸人、3. その他、に分けて考察する。

1. 寄席

どこまでが事実かは定かではないが、岡田の出自を記す数少ない資料のため、ここに挙げておく。

⁴『落語系図』（植村秀一郎、1929年）に「明治四十三年東区内安堂寺町上本町東エ入南側」とあるが、『桂文我出席控』（『藝能懇話』別冊4、2001年）には「明治四十四年八月八日より上本町二丁目富貴亭開業式新内定席」とあり、1911年が正しい。

⁵笑福亭松鶴口述「噺家五十年」（三田純一編別冊『上方はなし』解説、三一書房、1972年）に「明治四十四年の春、上本町の内安堂寺町通りに、富貴席という新内の定席が出来まして、落語と合同で開場式をいたしました。新内では、富士松小高、高蝶、鶴賀呂光、若登司、岡木小美根、玉子の連中、落語では、春団治、文我、三代松、春輔、それに曲芸の槌家万治の連中で大人満員、つぎの出番から新内連中だけ置き据えて、三友派から交代で噺家を借りておりましたが、客が余り来ますので、柱助六、金之助、佃家白魚、青柳華嬢、三遊亭円好、三尺坊などを専属に抱えまして興行をつづけました」とある。

従来、諸説紛々であった吉本の創業日について、『吉本興業百五年史』は、それらを詳細に検討した上で、「吉本夫妻が寄席経営に初めて携わった日」として、「吉本興行の創業は1912年（明治45）年4月1日である」⁶と声高らかに宣言している。ここにはちょっとした言葉のトリックが隠されているのだが、それはさておき、吉本が最初に携わった第二文芸館は、1910年9月30日に長田為三郎が天満天神裏に開場した寄席であった。ほかにも松島に第一文芸館、上本町に第三文芸館、京町堀に第四文芸館があったという。天満天神裏といえば、近くに天満青物市場があり、飲食店や生活用品店が軒を並べるとともに、八軒の寄席が集まっていたことから、「天満八軒」と呼ばれていた。落語の第二文芸館と杉の子亭、浮れ節（浪花節）の国光席、女義太夫の南歌久席、万歳の吉川館、江州音頭や仁輪加の朝日席というは席、講釈の八重山席が、それである。大阪を代表する浪花節の定席であった国光席のほかは、いずれも端席と呼ばれる二流、三流どころの寄席であった。1910年の『大阪市統計書』によれば、第二文芸館は、建坪48坪の中規模の寄席小屋であったことがわかる。興行日数は年間88日、入場者数は3256人（1日あたり平均37人）、入場料収入が358円（一人あたり約11銭）と、当時のほとんどの寄席と同じように夜の興行だけだったとはいえ、決して褒められた営業成績ではなかった。1913年3月号の『文芸画報』に掲載された「替り栄えせぬ浪花落語界」という一文に、この第二文芸館の動静が記されている。

互楽会があつたのだけれども、席主長田の消極主義から、漸次萎縮して了ひ、松島に、京町堀に、天満に、福島に文芸館、龍虎館といふ立派な寄席と、個人経営といふ情実のない立場にありながら、旧臘限り解散し、明家になつた各席は、天満文芸館だけ、以前大正派の名乗りを掲げた三友派が借り受け、

1913年正月の興行案内にも「浪花三友派 一月は既報の如く此花館、延命館、賑江亭に第二文芸館を加へ」⁷と載っている。長田は1912年の暮れに寄席経営から撤退、互楽派は解散し、空き家になっていた第二文芸館は三友派が借り受けることになったのだろう。続く2月、3月の興行案内にも「浪花三友派演芸場」として「天満天神文芸館」があげられている。ところが、4月の興行案内からは第二文芸館の名前が消えているのである。なぜだろうか。

その理由は、1934年（昭和9年）2月11日に、吉本せいが大阪府から表彰された際の『大阪毎日新聞』（3月1日付）の記事に明らかである。「資金五百円を以て大正二年四月北区天満裏に寄席を設け、興行を始めた」というのだ。同年4月号の『主婦之友』の掲載されたインタビューでも、せいは「大正二年の春が参りました」とその思い出を語っている。つまり、1913年4月に吉本泰三・せい夫妻は第二文芸館を買い取り、小屋主として寄席経営に乗り出すことになったのである。

⁶『吉本興業百五年史』（ワニブックス、2017年）。「明治四十五年四月吉本興行部主人吉本泰三氏 天満裏門文芸館を買収し、岡田興行部反対派経営にて興行す」という『落語系図』の記述に代表されるように、これまでは買収・経営をもって創業日と定められてきたが、本書では「寄席経営に初めて携わった日」を創業日としている。

⁷『大阪新報』（1912年12月29日付）。

岡田政太郎率いる反対派と提携して、入場料を相場の半額程度にまで値下げするとともに、番組についても、誰もが気軽に楽しめる色物中心に改めた。1914年10月のものと思われるチラシを見ると、互楽派時代と比べて落語家の格では劣るものの、東京の三遊亭円遊や筑前琵琶の竹葉琴月、曲芸や女道楽、泰三が好んだ剣舞など、ずいぶんと多彩な顔ぶれになっている。寄席の入口には「通り御一人金五銭」と大書した看板を掲げた。そして、それが売り物となった。「通り」とは入場料のこと。当時の寄席では入場料のほかに、座布団代や煙草盆代、さらに館内を案内するお茶子と呼ばれた女性に渡すチップなども必要であったが、なにしろ「通り御一人金五銭」である。吉本（当時は「芦辺合名社」「芦辺合名会社」）の狙いは、ものの見事に的中した。

翌年には福島の龍虎館、松島の芦辺館、続いて天神橋筋5丁目の都座、梅田の松井席（後の青龍館）を買収、まさに飛ぶ鳥を落とす勢いであった。だが、これらの寄席はいずれも第二文芸館と同じ端席である。吉本にとっては、一流席の獲得こそ次なる目標となった。そのチャンスは意外なところから訪れる。同年3月25日の衆議院議員選挙に立候補した蓬莱館の席主金沢利助が落選、その後、選挙違反で逮捕されたのである。利助は禁固3箇月、蓬莱館の運営を任されていた長岡源四郎も連座したため同罪に問われ、罰金80円を求刑された。寄席の経営どころではない。この事件をきっかけに、法善寺横丁にあった蓬莱館が売りに出されることになったのである。

蓬莱館といえば、かつて桂派の根城であった金沢席である。「二大関 はっけよいやの法善寺」と川柳に読まれたように、路地を挟んだ北側、つい目と鼻の先には、三友派の本拠地である紅梅亭が控えていた。第二文芸館を説明する際にも引いた1910年の『大阪市統計書』によれば、建坪50坪、興行日数は年間316日、入場者数は16826人、入場料収入は3726円と、大きさは第二文芸館とさほど変わらないものの、入場者数は5倍以上、入場料収入は10倍以上である。吉本が初めて手に入れた一流席であった。

開席を伝える当時のチラシには、「以前蓬莱館と称し寿々女会の定席として開演致し居り候処不肖当社経営に当り内外部を改造致すと同時に名も花月亭と改め是迄の蓬莱館時代の悪弊風を去りお茶子表方に至る迄改革し一大刷新を施し落語反対派の定席として開演仕候」⁸と記されている。いまに続く「花月」の使用は、このときから始まったのである。「花月」の由来については、これも諸説⁹あるが、いずれにせよ、華々しくも風情のある趣が人々の興味を惹き、その後、第二文芸館は天満花月、都座は天神橋花月、龍虎館は福島花月、芦辺館は松島花月と、主要な演芸場には「花月」の名が付けられた。蓬莱館の花月亭も南地花月亭と改め、法善寺の花月と呼ばれて、大阪の人々から親しまれることとなった。

吉本の快進撃は止まるところを知らない。1917年から1918年にかけて北陽花月亭、新世界花月、船場花月などが次々に誕生、また、この頃から「吉本興行部」の名称を使

⁸『吉本興業百五年史』（ワニブックス、2017年）所収。

⁹ 易に凝っていた落語家の桂太郎（桂小文我）が「花と咲くか月と陰るか、すべてを賭けて」ということで勤めたという説、「花は散っても次の春には必ず満開となり、月は欠けても一ヶ月後には必ず満月を迎える」、企業とは浮き沈みを繰り返しながら発展していくものだという意味を込めたという説、また、泰三・せい夫妻が法善寺でおみくじを引くと「花月」がよいと出たという説もある。

い始めている¹⁰。1919年1月末調べの「浪華落語反対派組合出演者名簿」¹¹によれば、吉本興行部の主要な人員は、泰三、庄之助（正之助）のほか、次の通りであった。

吉本興行部 経営主 吉本泰三
南地花月亭 主任 林庄之助
北陽花月亭 主任 山本与三郎
松島花月亭 主任 吉本弥平
天満花月亭 主任 菱谷徳次郎
新世界花月亭 主任 寺嶋義雄
福島花月亭 主任 中村助平
船場花月亭 主任 大矢源
天神橋都座 主任 河西三郎
北新地永楽館 主任 佐藤鳴臯
吉本興行部 通信員 佐藤鳴臯

さらに、1919年4月には、前年に買収した三友派の有力な席であった北新地の永楽館を花月倶楽部と改称、ミナミの南地花月と並んで、キタの花月倶楽部として吉本の重要な拠点となっていく。同年5月には、北堀江と松島の広沢館を傘下に加え、関西浪曲界を代表する「親友派」と提携、浪花節の興行に乗り出すとともに、その勢いのまま新世界花月亭も浪花節の常設館とした。この年に刊行された『大阪案内』¹²の「興業界の人物」という項目には、松竹会社、日活関西支店、ルナパークなどとともに「吉本興行部」が取り上げられ、「近時耳に属する演芸の為に凄じく活躍し出した者は花月亭の吉本氏である。夥しい芸人を抱え、寄席という寄席を悉く占有せんとする意気は洵に壮快である」と紹介されている。

そして、1920年、吉本の上方演芸界制覇に向けて、決定的な出来事が起こった。12月7日に反対派の太夫元であった岡田政太郎が急逝したのである。政太郎には栄太郎と政雄という二人の息子がいたが、長男の栄太郎は富貴の席主として寄席経営に携わっていたものの、性格がおとなしく興行には向かなかったため、次男の政雄が二代目の太夫元となった。とはいえ、明治34年生まれの政雄は弱冠20歳。芸人を束ねるにはあまりにも若すぎる。またその経験もないということで、政太郎とともに反対派の発展に尽くしてきた吉本泰三が後見人となった、と『吉本興業百五年史』には書かれているが、実際には岡田と吉本の間には大きな軋轢が生じていたようだ。このあたりの事情については次節で詳しく検討することとして、要点だけを掻い摘んで記せば、吉本のやり方に不満を抱いた連中が、吉本に対して十か条の要求を突きつけ、1921年1月29日からストライキに入ったものの、吉本はその要求を拒否、一派はやむなく吉本からの脱退を宣言し、次男の政雄を担ぎ上げ、兄の栄太郎を後見として「新反対派（元祖反対派）」を組織し

¹⁰ 1918年11月1日付の『大阪朝日新聞』「永楽館開館」が「吉本興行部」と書いた最初の記事。前年5月15日付の『大阪時事新報』には「芦辺合名会社」と記されているので、この間に社名を変更したのだろう。

¹¹ 『藝能懇話』第1号（1989年6月）所収。

¹² 『大阪案内』（南陽新聞社、1919年5月）。

た。かくして、反対派は分裂、泰三率いる反対派は「吉本派」と称することになったのである。

しかし、京都を中心に活動していた新反対派は、その勢力を維持することができなかった。1921年7月1日付で興行権を吉本に譲渡、一方、京都の新京極富貴席、笑福亭、西陣富貴ほかを傘下に収めた吉本派は、この頃から「花月派（花月連）」と名乗るようになる。これにより、上方落語界は花月派と三友派、それに小派閥の大八会の三つ巴体制となったが、10月には大八会の老舗千日前三友倶楽部が、12月には楽天地の朝陽殿がコドモ館と名を変え、吉本の経営となり、大八会の席は千日前から姿を消すこととなった。また、この年の11月には、東京神田の寄席川竹亭を買収して神田花月と改称、東京に初進出を果たすと、翌年の5月には、横浜伊勢佐木町の新富亭を横浜花月と改め、記念興行を開催している。

1922年、吉本花月派が三友派を合併して、大同団結が実現する。そのきっかけとなったのは、2月に大阪府保安課が、落語は平気で卑猥なことをしゃべり、風紀を乱しているとして、規制強化の方針を打ち出したことであった。8月26日付の『大阪毎日新聞』に掲載された「寄席の合同と向上 長いあひだ相敵視した三友派と花月派との合併」という記事は、合併の経緯について、次のように報じている。

大阪の寄席は古い老舗株の浪花三友派と近年大いに勢力を張つた花月派と、それに雑物の大八会とがあつて、この三派が大阪の寄席並に娯楽場約六十箇所をそれぞれ占有し、別に三友花月の両派は京都、神戸、堺の各市に自派の牙城を構へ鎬を削っていたが、三友花月両派は双方とも競争倒れで真剣味のない芸人に高給を貪られるのがオチとなり、寄席好きからもだんだん飽かれてくるので、両派ともに今迄の遣方を改めようと考へ出した矢先、大阪警察部で寄席演芸の向上に世話を焼くなどのことがあつて、両派妥協の機運が動き出し、遂に酒井猪太郎氏の肝煎で長い間敵視した三友花月両派がめでたく手打をした。

このように、先達の死や公権力の介入など、偶然なのか必然なのか、さまざまな経緯が重なったことで、吉本花月派が三友派と神戸の吉原派を合併し、演芸界の大合同が実現することとなった。大阪25、京都6、神戸2、その他8、合計41の寄席を傘下に収め¹³、ついに吉本が関西の演芸界を制覇するに至ったのである。1922年9月1日のことであった。

さて、ここまでは先行研究を参照しながら、大合同に至るまでの吉本の、特に寄席の制圧について長々と記述してきたが、次にその〈戦略〉的な特徴について考えてみたい。なによりもまず注目すべきは、吉本が寄席の多店舗経営に踏み切ったことだろう。複数

¹³ [大阪] 南地／花月、紅梅亭 北陽／花月倶楽部、花月 松島／花月 新町／瓢亭 天満／花月、都席 京町堀／京三倶楽部 御霊／あやめ館 福島／花月 北野／青龍館 松島／広沢館 千日前／三友倶楽部、南陽館 新世界／花月、芦辺館 上本町／富貴 玉造／中本倶楽部 内本町／松竹座 堀江／賑江亭、広沢館 天王寺／河堀亭 三軒家／与楽亭 福島／延命館 [京都] 京極／富貴、笑福亭 西陣／富貴 千本／長久亭 大宮／泰平館 堀川／春日亭 [神戸] 新開地／千代の座 三ノ宮／御代の座 [その他] 東京神田／花月亭 横浜／花月亭、新寿亭 名古屋／七宝館 伏見／常盤館 奈良／花月劇場 高田／花月座 和歌山／弁天座 (『演芸タイムス』創刊号、1922年11月)。

の寄席を同時に手がけることで、経済面や人材面のリスクを分散し、安定した経営を可能にしたのである。もちろん、すべての寄席が軌道に乗り、順調に売り上げを伸ばしていくことが理想にちがいない。とはいえ、寄席の興行はそれほど簡単なものではない。水物である。なんらかの事情で経営が行き詰ったとき、もしひとつの寄席だけであれば、看板を下ろすしかないが、いくつもの寄席を同時に経営していれば、ほかの寄席の売り上げで、その損失を補填することもできる。また、コストダウンも多店舗経営の大きな利点であっただろう。この当時、芸人たちは毎日3軒から4軒の寄席を掛け持ちしていた。いうなれば、複数の寄席に出演させることで、「仕入単価」を下げるのが可能になったのである。さらに、芸人が増えれば増えるほど、その人気の差によってギャラ、すなわち「仕入原価」の値下げ交渉が容易になる。吉本は、寄席の多店舗経営に乗り出すことによって、ひとつの寄席の売り上げに依存する経営体制から脱却し、より安定した経営の実現に成功したのである。

大林宗嗣はその著書『民衆娯楽の実際研究』（大原社会問題研究所、1922年）において、当時の興行物の経営方針を、次のように分析している

興行物の自然的傾向として密集する性質を有してゐるがかく密集せしめる事が果して都市社会政策上有利であるか否かは多少研究の余地がある。而し乍ら之れを経営者側から見れば密集せる地域を数ヶ所に有する事が有利である事は明かであつて、最近興行物の経営方針が著しく斯る傾向を示して来たのである。即ち一会社、一経営者にして相違せる地域に数個の興行場を経営して同一種類の上演物を交替的に上演して材料を休ませない様な方針を取り、又一方に於て多少の損失があつた場合でも他方で以て之れをうめ合せると云ふ事が出来る。又一方に於て多少の損失があつた場合でも他方で以て之れをうめ合せると云ふ事が出来る。又それが密集する傾向は歓楽的気分を濃厚ならしむる事と其の筋の客を引く便利を生せしめる事になるのである。何れにしても最近の興行経営の傾向は密集せる地域を数ヶ所に作ると云ふにある。

大林が指摘するように、「相違せる地域に数個の興行場を経営して同一種類の上演物を交替的に上演」するのが、「最近興行物の経営方針」であつた。この方針が、大阪という都市の近代化と軌を一にしていることは言うまでもない。人口の変動や交通手段の発達、治安や風紀、衛生観念の普及などと相俟つて、とりわけ明治10年代から30年代にかけて幾度となく繰り返されたコレラの大流行を受けて、娯楽の場と生活空間との間に距離を求める感性が育まれてきた。各町内に分散していた寄席は、整理統合されて都市の決まった場所へと局地化され、客も遠方からやってくるようになったのである。寄席は町内の娯楽から都市の娯楽へと変貌を遂げることになった¹⁴。その結果、1884年には、「大阪ハ東京に次ぐの繁華の地にて何事も多く彼地に譲らぬを只寄席の構造のみ太く劣りて多くハ黒暗く汚穢く殊に衛生上に重要な空気の流通あしけれ」¹⁵と非難された大阪の寄席も、1904年には、「寄席の技芸ハ東京の方が進歩して居るが、寄席の構造、

¹⁴ 拙論「從「日常」到「非日常」——寄席的「近代化」與技藝之變化——」（『戯劇学刊』第29期、2019年1月）を参照。

¹⁵ 『大阪朝日新聞』1904年8月31日付。

設備ハ大阪の方が進歩して居る」¹⁶と、貶されているのか褒められているのかよく分からないが、いずれにしても、その立地や構造、設備が少しずつ都市化＝近代化している様子が見て取れるだろう。「相違せる地域に数個の興行場を経営して同一種類の上演物を交代的に上演」すること、すなわち寄席の多店舗経営は、まさに時代の要請だったのである。

もちろん、多店舗経営は吉本の専売特許というわけではない。では、いくつもの寄席を経営する上での、吉本独自の〈戦略〉とは、いったいどのようなものであったのだろうか。吉本がそれまでの寄席の経営者と根本的に異なるのは、中央への志向がきわめて強いことだろう。ミナミの南地花月亭、キタの花月倶楽部、東京神田の神田花月、横浜伊勢佐木町の横浜花月など、所縁や馴染みのある土地、あるいはその周辺地域にではなく、つねに興行の中心地に照準を定めている。それは、三友派の発起人にして賑江亭の席主であった藤原重助や、法善寺紅梅亭の女主人原田むめには想像もつかない経営方針であったにちがいない。反対派の太夫元岡田政太郎にしても事情は同じである。その晩年、本拠を大阪市東区の玉造駅前に構え、京都の新京極に出張所を設けていた岡田は、堀江御池通の賑江亭、松屋町生玉御旅所内の松竹座、内安堂寺町の富貴席、玉造黒門町の三光館、京都新京極六角下ル桜ノ町の笑福亭、京都千本通り中立売上の長久亭、京都堀川下長者町角の春日亭、京都大宮通仏光寺下ルの泰平館を配下に収めていたが、直営するのは富貴、三光館、笑福亭の3館のみで、繁華街の一等地が多い吉本に対して、場末の端席ばかりであった。一方、吉本は中央への執念をたえず燃やし続けていたのである。それは、当時としてはいささか異常なほどであったが、大阪という都市の近代化や人々の感性の変化に、いち早く反応、そして対応した結果だったのである。その姿勢はいまも変わっていない。

また、これもすでに多くの指摘があることだが、いくつもの寄席を経営するだけでなく、それを「花月」という名によってブランド化し、チェーン展開したのも、吉本独自の〈戦略〉であった。村島歸之は花月亭の表飾りについて、次のように述べている。

「花月亭」は色模様提灯を軒に吊り、その下に絵看板三枚、字看板六枚、立看板二枚、その外に季節々々に応じて櫻、或ひは紅葉等の垂れ技によつて歌舞伎の舞台もどきに飾り立てゝゐる。そこに歌舞伎、錦絵等に現れた浪花情緒を出そうとしてゐる営業者の努力が窺はれる。そして全体としての「花月亭」は白く洗ひ立てられた生木の気持のいゝ小屋として光つてゐる。¹⁷

村島と同じく、佐藤鳴臯も吉本の寄席について、「高座を極派手に、お茶子に美人を揃へ、表飾を賑かにと云つた風にして」¹⁸と記しているが、経営する寄席を「花月」と名づけ、表飾りを華やかにすることで共通性を与え、同一のブランドであることを強く

¹⁶ 『読売新聞』1904年7月28日付。

¹⁷ 村島歸之「民衆娯楽の王城「千日前」」(『大大阪』第7巻第7号、1931年7月)。

¹⁸ 佐藤鳴臯「東西寄席の研究」(『大阪演芸新聞』第5号、1918年11月5日)。また、『上方』第5号にも、「特色ある大阪寄席の表構と装飾」として、北新地花月の入口と南地花月の華やかな表飾りの写真が載せられている。

アピールする。と同時に、特定地域内に集中して展開することで、認知度の向上や集客の増加など、経営の効率化をはかるだけでなく、地域内でのシェアを拡大し、競合他社の入り込む余地をなくすという〈戦略〉が実践されていたのである。それを現代のマーケティング用語では「ドミナント戦略」というらしい。さらに、ここで忘れてはならないのが、当時の大阪と東京における興行方法の違いである。

御承知の通り大阪の落語は各派とも各別々に専属の寄席を持つていて、かの東京のように半月毎に全部出演者の顔ぶれを一変してしまうという事はない(東京では三遊は三遊の席、柳は柳の席と決つてはおるが)、したがって桂派に属する寄席は年が年中同一桂派の落語ばかりをかけておるし、三友派は三友派でこれ又同様、少しも変つた顔をかける事をせぬ、たゞ二三東京下りの新顔を交せて僅かに単調のソシリをまぬかれておるのだ¹⁹

現在でも、東京の定席では上席(1日～10日)、中席(11日～20日)、下席(21日～30日)と、10日ごとに落語協会と落語芸術協会が交互に興行を行っている(鈴木演芸場は落語協会のみ出演)。このように東京では10日ごとに顔ぶれがガラリと変わるが、関西では、桂派の寄席なら桂派が、三友派の寄席では三友派が出演するという具合に、年から年中、同じ芸人が並んでいた。つまり、吉本は寄席を多店舗経営、チェーン展開することによって、経営の安定化と効率化をはかるだけでなく、所属する芸人をさまざまな寄席に出演させることで²⁰、それまでの寄席と比べて、内容の面においても、よりバラエティに富んだ魅力的な番組を提供することができるようになったのである。

2. 芸人

次に、落語家や漫才師、色物の芸人について、吉本がいかなる〈戦略〉によって、それを掌握していったのかを検討する。

1913年、天満の第二文芸館を買い取り、寄席経営を始めたときには、吉本泰三・せい夫妻には、まだ独自に芸人を抱えるほどの力はなかった。岡田政太郎の反対派から芸人を派遣してもらっていたのである。とはいえ、『落語系図』の「大正三年八月大坂反対派岡田興行部連名」を見ても明らかなように、この時期の反対派の芸人たちも、その多くは二流や三流、あるいはそれ以下であった。1915年には、岡田が京都新京極の笑福亭を買収、吉本も大阪法善寺の蓬莱館を手に入れ、両席の座付であった芸人を継承、一流どころの芸人が初めて反対派の高座に上がることとなった。それでも同年の『大阪毎日

¹⁹ 豚園生「桂派及び三友派付ケタリ互楽派」(『大福帳』第49号、1908年2月号)。

²⁰ 花柳芳兵衛(桂小春団治)は「その頃、はなし家は三軒又は四軒ぐらいを一晩にかけ持ちする。漫才の小屋は昼席があったが、落語の方は夜だけなので年中ほとんど休みなしでも、それほど辛いとも思わなかった。尤も、会社にいらまされると、随分不便な変な廻り方をさせられる。自宅からうんと離れた西の端にある寄席がふり出しで、今度はずっと東の端の寄席を勤めて、つぎに又西の方へ戻って来て……東の方の我が家へ帰るなんてことをやらされると、気分的に随分と疲れてしまう。順序よく廻って帰ってくるようなかけ持ちなら四軒ぐらい楽なもの……まあ若かったこともある」(桂米朝『上方落語ノート』、青蛙房、1978年)と述べている。

新聞』は、反対派の芸人について、次のように報じている。

現在大阪に籍を置く落語家の数は二百余名。それに反対派と称して喧嘩の相手も無いのに無暗と筍箆風屏をきめている小砂眼入党が二百五十名、併せて五百に近い頭数がある。この中の半数は殆ど素人で、ただ高い所へ上って縁も因縁も無い他人様のお笑いを買いたいという変な道楽から、夜になると怪しい一張羅の羽織を懐中に及び、掛持と称して満員の電車で飛乗りしては車掌から剣突を喰っている代物で、これらは皆反対派の眼人党であるが、稀にはこの素人の中に前途有望の天才者がいる。²¹

「無暗と筍箆風屏をきめている小砂眼入党」とは言い得て妙だが、それでも1916年になると、人気者の初代桂枝雀、三代目立花家千橋に加えて、浪花三友派から初代橋ノ円、二代目桂小文枝、五代目橋家円太郎、立花家喬之助らの引き抜きに成功、次第に力をつけてきた反対派は、三友派を脅かす勢いで、その対抗馬へと成長していく。翌年には、5月1日、6月1日、9月1日に、五代目金原亭馬生、三升家紋右衛門、初代桂枝太郎がそれぞれ反対派へ加入することとなった²²。一方、前節で述べたように、この時期、吉本も次から次へと寄席を手中に収め、増加し続ける反対派の芸人たちに活躍の場を提供していた。12月27日付の『大阪朝日新聞』は「反対派は各席を打上げ、二十八日に二百余名の忘年会を南陽館に催す。来春は新顔五十六名加入」と報じている。その勢いのほどが知れるだろう。それにしても、反対派はなぜここまで急速に勢力を拡大していくことができたのだろうか。その一因を、佐藤鳴臯は次のように分析している。

…大阪で三友派と大八会とは其の席の経営者自身が席の経営と芸人の操禦^{まくり}とを兼ねてゐるが、反対派だけは芸人の方は吉田〔岡田の誤り〕と云ふ太夫元がして居り、席の方は吉本興行部で一手に引受けてゐる。従つて反対派が一番其の芸人の統一がついてゐる、そして席も悉く完備してゐる（〔〕内引用者）。²³

芸人の獲得は岡田、寄席の買収は吉本と、それぞれを分担することによって、急激な成長を遂げることになったというのである。とはいえ、吉本としても、いつまでもただ芸人たちに場所を提供するだけの存在ではいられない。これまで芸人供給の一切を岡田に委ねてきた吉本だったが、松島と堀江の広沢席の入手をきっかけに、1918年には、この二席と新世界花月の三席だけではあるものの、親友派から浪曲師を入れて手打ちの興

²¹ 「落語家の大合同 寿々女会、反対派、二友派合同を画す」（『大阪毎日新聞』、1915年6月15日付）。

²² 一時期、反対派に籍を置いていた八代目桂文楽は「大阪では反対派に一年いまして、内本町のうどんやのはなれを借りていました。…なぜ内本町に住んだかてえと、ここに富貴という席があって、この寄席が反対派の本部だったからです。反対派のたばねをしていたその富貴の席亭は風呂政（ふるまさ）とよばれていた人でしたが、五銭という安木戸で毎晩満員です。だもんで、しまいにだんだんいい看板の落語家加わるようになった。そうすると、元からいた中流以下の人たちはだんだんいいところへつかわれなくなりました。何しろえらい席亭でしてネ。ある年、大水だったか大嵐だったか、商売がいけなくなったときには、大きな荷車へ一ぱい米を積んで、そうしてこれを連中に配りました」（『芸談あばらかっぺそん』、青蛙房、1957年）と、その当時のことを振り返っている。

²³ 佐藤鳴臯「東西寄席の研究」（『大阪演芸新聞』第5号、1918年11月5日）。

行を始めている。もちろん、そのほかの花月席には、相変わらず反対派の芸人が出演していた。1920年に刊行された『阪神ダイレクトリ』(大阪新報社)は、「落語反対派は、最近数年間に著しき振興を示し、出演者も斯界の巨頭に接して、其陣容に於ても優に三友派を凌がんとするものあり」と記しているが、わずか数年前までは、二流や三流、あるいはそれ以下の芸人ばかりであった反対派も、いまでは一流どころの芸人が少しずつ揃うようになってきたのである。

ところが、前節でも触れたように、1920年12月7日、岡田政太郎が急逝する。葬儀は18日正午より南区上本町五丁目東入無量寺で行われたが、その翌日には、早くも吉本が動き出す。自動車を飛ばして、大阪中の寄席をかけまわり、落語家の真打連を呼び出しては、「従来の太夫元よりも自分が太夫元になれば給料も増せば前金も沢山出すと、木に餅のなる様な話を持ち込んで」、一方的に給金の辞令を交付したのである。

こうして、岡田の歿後、瞬く間に反対派の実権を握ったかのように見えた吉本であったが、ここにひとつの事件が勃発する。その発端は「二銭問題」であった。岡田は在世中、京都大阪の寄席で毎日一人の客につき、二銭の積み立てをしていた。その積立金を芸人に配当することで、なにかあったときには、それが調整弁としての役割を果たしていたのである。ところが、吉本はその慣習をただちに廃止、この「二銭問題」がきっかけとなり、一部の芸人たちの間では、吉本による反対派乗っ取りへの疑念がくすぶり始めた。また、吉本興行部に掲示されていた岡田の遺言状が、じつは偽造であったこと、さらに、半分は棒引きにするという約束で岡田から引き受けた芸人たちの借金を全額請求するなど、不満と危機感を抱いた70人ほどの芸人たちが、京都を拠点に、十か条の要求を突きつけ、ストライキを起こすことになったのである。以下が、その十か条である。

- 一、岡田政太郎君遺言と称するものを掲示して反対派継続の事を吉本興行部より声明せる事。
- 二、故岡田太夫元の遺言と相違の事。
- 三、各席の二銭積立金処分不公平の事。
- 四、故岡田太夫元より芸人の前借金半減にて引継を受け乍ら全額に活用せる事。
- 五、新幹部加入に際し旧幹部を無視せる事(春団次、文団次の件)。
- 六、遊撃隊を切詰し為め、観客に不満を與へて平然たる太夫の態度。
- 七、座員に対する新貸金の懸引。
- 八、看板の出し方に順逆甚だしく不公平なる事。
- 九、芸人の待遇上に関する事。
- 十、反対派太夫元権全部を掌握され、為めに故岡田太夫元の遺族の前途憂慮に堪へざる事。²⁴

当時の新聞には、岡田を秀吉に、その息子政雄を秀頼に、そして泰三を、天下を横から

²⁴ 「反対派紛擾真相」(『京都日日新聞』1921年2月2日付)。

かつさらった家康に見立てた記事²⁵もあり、「誠にものゝわかつた人で、真に芸人の心持ちを知り、芸人を愛すると云つた人であつた」²⁶と称賛された岡田に対して、吉本は「卑劣な興行師」²⁷と厳しく非難された。それでも、吉本がこの十か条の要求を拒否したため、初代桂枝太郎、三代目笑福亭円笑、初代桂桃太郎、二代目笑福亭福円らを中心とする一派は、やむなく吉本からの脱退を宣言、次男の政雄を担ぎ上げ、兄の栄太郎を後見として新反対派（元祖反対派）を結成した。京都在住の噺家たちが多かったのは、政太郎が晩年京都に住み、在京の芸人の面倒を特によくみていたからだろう。かくして反対派は岡田と吉本に分裂した。『落語系図』に掲載されている「二月一日より吉本派連名」「二月一日より岡田派連名」とは、まさにこのときのものである。しかし、岡田の新反対派（元祖反対派）は6月末までしか命脈を保つことができなかった。若い二代目には一派を統率するほどの力がなかったのだろう。7月1日には、太夫元の権利と自家経営の寄席を吉本に譲渡し、反対派は吉本興行部の所有となった。『難波戦記』そのままに、秀頼（政雄）はあえなく敗れ、家康（吉本）の天下となったのである。枝太郎、桃太郎ら吉本に反旗を翻した連中のほとんどがその傘下に入り、9月1日には花月派（花月連）と名を改めた。円笑、福松らどうしても軍門に下ることを潔しとしなかった一部の芸人は、かつてのライバル三友派に加わることとなったのである。

1921年1月1日、反対派内のゴタゴタのさなかではあったものの、吉本の芸人獲得〈戦略〉にとって、きわめて大きな出来事が起こった。そのときのビラを見てみよう。

初春大興行 當る酉年元日より連夜
東都歌舞伎声色会幹部 紀の国屋森松 初の御目見得 東都講談界之権威 神田伯龍
久々の出演 寅派の高足 歌澤寅枝美・寅由喜 久々にて
新加入桂春団治 桂米団治 桂文団治
出番順：桂左雀、桂小雀、桂菊団治、橘家小円太、桂小南光、三遊亭十郎、三遊亭五郎、
桂扇枝、三遊亭円若、桂米団治、桂枝雀、神田伯龍、紀の国屋森松、露の五郎、橘家円
太郎、歌沢寅由喜、歌沢寅枝実、桂文団治、三舛家紋右衛門、立花家千橘、桂春団治、
三遊亭円遊
落語反対派演芸場 南地花月亭 電南四三八・四一一九番 吉本興行部経営²⁸

注目すべきは、「新加入桂春団治 桂米団治 桂文団治」だろう。覇権を争う三友派の大看板三人（三団治）が同時に吉本興行部へ移ってきたのである。なかでも春団治は、後に富士正晴によって評伝が書かれ、渋谷天外や藤山寛美、森繁久彌らによって舞台や映画でお馴染みとなる、「後家殺し」とあだ名された当代一の人気者であった。正岡容によれば、言葉に「呆れるばかりの放胆さ斬新さ」があって、その落語は「まことに奇想天外であり、ポンチ絵に見られるナンセンスの極致」²⁹であったという。ちなみに、

²⁵ 「難波戦記の儘 落語反対派分裂譚」（『京都日出新聞』1921年2月2日、3日付）。

²⁶ 尾上二平「大阪落語の今昔（一）」（『上方』第44号、1934年8月）。

²⁷ 「反対派紛擾真相」（『京都日日新聞』1921年2月2日付）。

²⁸ 『藝能懇話』第6号（1993年）所収。

²⁹ 正岡容『隨筆寄席囃子』（古賀書店、1967年）

富士正晴『桂春団治』（河出書房、1967年）には、「浪花派」を組織したものの、うまくいかず、資金繰りにも困っていた春団治を吉本が買収したと記されている。また、同書のなかで、春団治と吉本の橋渡しをしたのは栗岡百貫という人物ではなかったかと、富士は推測している。

いずれにせよ、「三友派から文団治、米団治、春団治の三団治を金に飽かして引き抜いた」³⁰ことで、芸人もようやく一流どころが顔を並べるようになった。春団治、米団治、文団治とその一門を含め、吉本派となった連中は、5月の末に堺の大浜で大運動会を開催しているが、その参加者はなんと1000人にのぼったとされる。反対に、三団治の抜けた三友派は、反対派の分裂騒ぎも追い風にはならず、四代目笑福亭松鶴、二代目三遊亭円馬を中心に、ともかくも紅梅亭だけは死守していたが、吉本に属する寄席及び芸人の数に比べて、三友派のそれはこの時期かなりの差が出来てしまっていた。そこで、一計を案じた三友派は「浪花演芸会社」を設立、東京の会社派と提携して反対派に対抗しようとしたものの、それも骨折り損のくたびれ儲け、結局は先に述べた通り、1922年9月1日、吉本花月派が三友派と神戸の吉原派を合併するかたちで、演芸界の大合同が行われ、ついに関西の演芸界を制覇するに至ったのである。

さて、ここまでは創業から大合同に至るまで、吉本がいかにして芸人を獲得してきたのかについて記述してきたが、次にその〈戦略〉的な特徴について纏めておきたい。

それは第一に、一見矛盾しているかのようにも思われるが、人よりも場所を優先してきたことだろう。特に、その初期においては、芸人よりも寄席を、つまり演者よりも演じるための空間を重視してきたということである。たしかに、創業後すぐに芸人を傘下に収めることは、金銭的にも、人脈的にも困難であったのかも知れない。しかし、寄席の経営が軌道に乗り始め、いくつもの寄席を同時に切り盛りしていくようになって、吉本は芸人のマネジメントになかなか手を出さなかった。あくまでも岡田の反対派から派遣される芸人を使い続けてきたのである。

なぜだろうか。それは逆の状況を想定してみるとわかりやすい。歴史に「もし」はないと言うが、たとえば、芸人の獲得は吉本、寄席の買収は岡田、そして岡田が先に亡くなったとしよう。その場合、歴史そのままに吉本が関西の演芸界を制覇することになったのだろうか。多くの芸人を抱えていたとしても、その芸人たちを出演させる寄席がなければ、ただの無駄飯食いを雇っているにすぎない。それでなくても、芸人は高座に上がり続けなければ、文字通り生きていくことのできない人種である。もし、さきほどの前提に立てば、岡田の死後、多くの芸人がみずからの芸を、よりよい環境で、つまり一流の寄席で披露できるように、吉本から離れていくことになったのではないだろうか。言い換えれば、人よりも場所を優先し、寄席をチェーン展開することによって、結果的には、芸人を占有するための受け皿を作り上げることになったのである。

さらに、もう少し言えば、人よりも場所を優先し、寄席を多店舗展開することによって、芸人のみならず従業員のモチベーションを向上させることにも繋がったのではないだろうか。ひとつの寄席を運営するだけでは、芸人には出番を、従業員には立場や地位を用意することができず、有能な人材の流出を防ぐことができない。反対に、自分の所属

³⁰ めの字生「大阪寄席合戦」（『文芸倶楽部』第27巻第8号、1921年6月）。

する組織が、寄席をチェーン展開し、かつ一流席を多く所有しているとするれば、芸人や従業員にとっては、結果を残すことによって、キャリアアップにつながるなど、将来的な可能性が広がることも少なくないだろう。優秀な人材が定着することで、業績もよりいっそう伸びていくはずである。実際、反対派の大番頭で吉本に出向して支配人となっていた青山督や、東京の落語睦会の事務方で主任の地位にあった瀧野寿吉など、錚々たる顔ぶれが、吉本に移籍してくることとなった。橋本鐵彦は桂米朝との対談で、この二人のことについて、次のように回想している。

橋本 そうです。浅草でいろいろやっていた。結局、落語家を裏で締めてもらう必要から、吉本は青山さんをマネージャーとして入れたんです。吉本の社としてのマネージャーはこの人が最初です。つづいて滝野さん。滝野さんは伊藤痴遊の付き人だったんですよ。滝野さんは考え方が新しかったのでよかったですね。³¹

吉本は人よりも場所を優先することで、芸人の功名心や従業員の出世欲をくすぐり、結果として寄席だけでなく芸人をも、さらには優秀な従業員をも獲得することになったのである。

また第二に、金銭面における馴れ合いを排除し、使用者（吉本）と労働者（芸人）との雇用関係の厳格化を推し進めたことがあげられるだろう。それは、先に示した十か条の要求の内、「三、各席の二銭積立金処分不公平の事。」「四、故岡田太夫元より芸人の前借金半減にて引継を受け乍ら全額に活用せる事。」「七、座員に対する新貸金の懸引。」を見ても明らかである。ある意味で、岡田の死は、吉本にとっては窮地ではなく絶好の機会だったにちがいない。前の太夫元から半額で引き受けた借金を、その相手がこの世からいなくなったとはいえ、約束を反故にして、芸人に全額を請求することなど、普通感覚では考えられない。だが、これは興行の世界の話である。吉本がしたたかであったと言うべきなのだろう。

月に一度「芸人に金を貸す日」を設け、大正7年の米騒動のときには、干上がった芸人たちに、みずから米を配って歩くなど、古い親方的な存在であった岡田とは対照的に、吉本は、芸人に対して給金の辞令を交付し、契約関係を明確にするとともに、借金についても厳しく管理した。もっとも、岡田が芸人に気前よく金を貸していたのは、ただの親切心というだけでなく、金を貸すことで、金と恩義の両面から芸人を縛りつけようという魂胆もあったにちがいない。それでも、芸人たちは「政やんに食わしてもろてる」という意識を強く持っていたという。しかし、吉本のやり方は岡田ほど甘くはなかった。結局は、多くの芸人が借金に縛られ、吉本の意のままに動くようになったのである³²。

そして第三に、旧来の芸人社会における上下関係や階級制度、楽屋でのしきたりや待

³¹ 桂米朝『四集・上方落語ノート』（青蛙房、1998年）。

³² 時代は少し異なるが、木下華声『芸人紙風船』（大陸書房、昭和52年）に、「吉本興行部は阿部野のヤクザを後楯に芸人を強引に契約させてゆき、旧来の勢力であった三友派、大八会、神戸派、京都派を潰してしまった。私が吉本興行を離れたのも白紙委任状に実印を押せと言われたからである。これでは一生、吉本興行の言いなりに生活をしなければならない。エンタツ、アチャコ、三亀松、川田晴久他の芸人は白紙委任状のために生涯、吉本を離れられなかった。吉本裏面史を書いたら、泣かされた芸人の山ができるかも知れない」という証言が残されている。

遇などについても、思い切った改革を断行したことがあげられるだろう。それは、十か条の要求の内、「八、看板の出し方に順逆甚だしく不公平なる事。」と「九、芸人の待遇上に関する事。」によくあらわれている。1922年11月4日付の『大阪朝日新聞』は、当時の状況を次のように報じている。

爾来師弟の情義は薄らぎ、稽古よりも先づ金をとといふイヤな思想か根を広げ出した。昔は席主か真打一枚を抱へると一行の顔振れはその門弟で拵へ、給金は夫々師匠が定めて分配してやつたものを、現在は人気本意で席元が落語家一名宛の値路をする。噺は下手でも人気のある者は給金が高い。従ってその場逃れの浮ッ調子な落語が多くなって深味といふものが全然なくなり、踊りの上手な者はすぐに立って舞い、声の良い者は安楽節のひとつも唄って精々二十分の受持時間（昔は一名に一時間以上も割当てられた）を胡麻化せばそれで済む。今日落語の行詰も根ざす所はこの辺にあるらしい。³³

師弟や一門を中心に保たれてきた上下関係や秩序が、諸派乱立の時代になると、そのタガが弛み始め、ことに吉本が関西の演芸界を制覇するに及んで、それまでの落語家の階級制度は、ほとんど有名無実化していくこととなった。現在、東京においては前座、二ツ目、真打という階級があるが、大阪にはその制度自体がない。それはこの時代に端を発するのである。多くの芸人たちによって次の世代、またその次の世代へと守り伝えられてきた芸人社会の伝統や秩序よりも、興行主側の意向が次第に幅をきかせるようになってきたのである。「噺は下手でも人気のある者は給金が高い」と書かれているように、給金や番組編成も芸の良し悪しや年功序列の香盤ではなく、いかに客を呼べるか、つまり人気の有無がその指標となっていった。吉本はこれまでの落語家中心の寄席興行を、興行主主体の組織に改め、落語家以外にも大衆に受ける色物の芸人を積極的に採用するようになっていく。もちろん、これまでの伝統や秩序を堅持したいという芸人たちの声も少なくなかっただろう。だが、第二の特徴として挙げた金銭の力によって、吉本はその声を黙らせ、興行主が芸人を「使い」、芸人は興行主に「使われる」という関係性を作り上げることに成功したのである。

3. その他

ここまで、寄席と芸人に焦点を当てて、吉本の興行〈戦略〉について見てきた。最後に、その他の〈戦略〉的な特徴についても、いくつか指摘しておきたい。

I. 興行部と宣伝部

吉本興行部では、寄席の経営が成長、発展していくにつれて、事業体としての規模を拡大するとともに、社内組織を整備して、各部を設置することとなった。1921年10月9日の『大阪毎日新聞』に、次のような広告が掲載されている。

◇ [広告] 興行部新設披露

³³ 「民衆芸術の闇魔帳（下） 値踏の落語」（『大阪朝日新聞』1922年11月4日付）。

当興行部ハ今回新ニ余興部ヲ設ケテ諸会社慰安、団体宴席等各種余興ノ御依頼ニ応ジマス

一、余興部ニハ有ラユル芸人ヲ専属シテアリマスカラ如何ナル大々宴会ト雖モ他ノ余興屋ノ為シ能ハサル安価ニテ権威アル一座ヲ提供致シマス

一、御指定ニヨリテハ東京ニ在ル芸人ト雖モ最モ迅速ニ呼ビ寄セ御希望ヲ満シマス

一、部内ニハ兼テアクタ式活動写真機ヲ設置シテアリマスカラ御家庭其他何処ヘデモ、フィルム機械等持参 弁士技師出張、軽便安価ニ映写モシ撮影モ致シマス

大阪市南区笠屋町四五番電南四一一九番 吉本興行部余興部

この広告によれば、個人であれ、法人であれ、依頼に応じて各種イベントを企画立案するとともに、それに相応しい芸人を手配して、イベントを実施、希望があれば活動写真の映写、撮影をも担当するのが「余興部」である。当時の興行会社としては先駆的な事業であった。たとえば、1924年1月21日に開催された『大阪毎日新聞』の百万部突破祝賀会には、この余興部が演芸を提供している。ライブ制作やテレビ番組制作、映画制作、コンテンツビジネスなど、いまに繋がる制作会社としての吉本の一面が、すでに備わりつつあったことがわかるだろう。

また、余興部とともに注目されるのが、「宣伝部」の存在である。1926年発行の吉本興行部『記念興行』のパンフレットで、「両度の国勢調査の宣伝にメートル法の普及に、堅苦しい軍事方面にても在営者家族の悲壮なる実話に関して種々と材料を提供されまして、それらを巧く骨子として舞台に上演し多大な効果を収めております」³⁴とアピールしているように、国税調査やメートル法の普及、軍事方面といった他社の宣伝広告、特に公共事業から委託されたPR業務を、芸人を使うことによって、より効果的・効率的に行うのが宣伝部の職務であった。パンフレットにも記載があるが、具体的な活動事例に、国勢調査のPRがある。落語家や萬歳師が笑いを交えながら、国勢調査の目的や調査票の記入方法を説明したことで、世間からも好評を以って迎えられた。現在、吉本は官公庁や経済界との深い結びつきを持っているが、早くもその関係性が構築され始めていたのである。

II. PR 活動

もちろん、吉本は他社のみならず自社の事業についても、より広くアピールするために、さまざまなメディアを駆使して、積極的なPR活動を展開している。その先駆けとなったのが、1922年11月に創刊された『演芸タイムス』である。B4二つ折りで8ページから12ページ、10日ごとの発行で3万部を印刷、各寄席小屋で配布された。興行案内や芸人の身の上話、読者の投稿コーナー、人気投票の呼びかけ、また文芸的価値を高めるために、識者の評論文なども掲載されている。

この『演芸タイムス』の内容をより充実させるために、1926年11月、吉本は雑誌『笑売往来』を創刊、さらに、1935年8月に創刊された大衆娯楽雑誌『ヨシモト』、1981年4月創刊の『マンズリーよしもと』、2009年にリニューアルされた『マンズリーよしも

³⁴ 『吉本興業五十年史』(ワニブックス、2017年)。

と PLUS』(2013年5月号をもって休刊)へと続いていく。また、1933年には、寄席の情報や芸人のエピソードを満載した謄写版刷りの「吉本演芸通信」を発行、毎朝、大阪電報通信社(電通)を通じて、新聞社などマスコミ各社に送付された。PR誌の発刊やマスコミへのニュース提供など、吉本は早くから、さまざまな媒体を組み合わせ、より幅広い層に向けて自社の事業をPRする、クロスメディア戦略を実践していたのである。

Ⅲ. 新しい大衆娯楽

『新修大阪市史』(第6巻、新修大阪市史編纂委員会編、大阪市、1994年)によれば、第一次世界大戦を契機として、大阪では重化学工業をも加えた工業化が加速的に進展するとともに、人口も大阪市域では1912年から1918年にかけて22.7%増加し、西成郡では同時期に52.6%、東成郡でも59.3%という急増ぶりであったという。この両郡ではその後も都市化が急速に進み、1925年4月の第二次市域拡張により大阪市域に編入される。結果として、1904年には100万人だった大阪市の人口は、1925年には211万人を記録し、20年で100万人も増えることとなった。211万人の内、じつに70万人が旧大坂三郷ではない東成郡、西成郡の住民であったという。都市の労働力として、周辺の農村から農民たちが地代・家賃の低い場所へと移り住むことになったのである。

このような新参者たちにとって、浪花情緒たっぷりの落語の愉しさは、あまりわかりやすいものではなかったようだ。宮本又次は大衆から好まれる娯楽の変遷について、次のように述べている。

資本主義が生まれて貧富の懸隔が著しくなり、暇と金の無い民衆が生れた。彼等は習練を必要とせず直観的直覚的に味ひ得る娯楽で無ければ間に合はなくなつた。かくてこの要求の下に浪花節が現はれ、更に活動写真がすさまじき勢力を以て隆盛し他の興行物を圧倒するに至つたのである。³⁵

山口廣一も「日々妻子を養ふことがやつと精一杯の現代大衆に「芸」を味ふなどいふ余裕のないことは判り切つてゐる」³⁶と指摘するとともに、「芸」のある落語の衰微と「芸」のない萬歳の興隆について分析している。新しい客層が求めたのは、理屈抜きに、気軽に、しかも安価に楽しめる娯楽だったのである。

創業当初から、軽口や新内、音曲、踊り、曲芸、剣舞、琵琶、奇術など、さまざまな娯楽を安い値段で提供してきた吉本も、1924年7月に「キネマ部」を設置して、上福島の龍虎館を改装してキネマ花月としてオープン、1926年1月には天神橋筋5丁目の都館をキネマ都館と改めた。また、同年11月には折からの少女歌劇人気に便乗して、花月乙女舞踊団をデビューさせている。吉本は、大衆の欲求を満足させるために、新しい大衆娯楽を模索、発掘し続けてきたのである。なかでも有名なのが安来節だろう³⁷。1921

³⁵ 宮本又次「明治時代大阪の寄席と見世物【下】」(『大大阪』第7巻第11号、1931年11月)。

³⁶ 山口廣一「衰えた落語と文楽」(『上方』第51号、1935年3月)。

³⁷ 吉本は安来節以外にもさまざまな郷土芸能を招致している。一例を挙げれば、1922年4月にアイヌ団一行男女十数名が北新地花月倶楽部に出演、そのときのピラには「熊祭 滅び行く……民族! 彼等……アイヌ種族が崇高なる祭典にして日高アイヌの誇りとする世に名高き熊祭り……此祭典に使用すべき諸調度

年には、千日前三友倶楽部に安来節を出演させるとともに、その翌年には、三友倶楽部と新世界の芦辺館を安来節専門館にしている。

この安来節の興行をきっかけに、吉本最大のヒット商品となる萬歳(万才、漫才)が、その頭角をあらわしてくるのである。樋口保美によれば、「かつて江州音頭がそうであったように、安来節にもその合間にいろんな芸人が登場し、目先を変えて滑稽を演じた。これを「つなぎ」というのだが、ここに多くの萬歳師が起用された」³⁸という。たしかに、古い萬歳師の談話を読んでみると、安来節の「つなぎ」から出た人が非常に多い。安来節の流行とともに萬歳の出番も徐々に増え、「安来節萬歳合同一座」の看板で、萬歳と安来節が半分ずつ演じられるようになり、こうして萬歳は安来節を少しずつ片隅へと押しつけていったのである。

吉本はこのように低く見られていた芸を引き上げるのが、じつにうまい。喜劇作家の香川登枝緒は、子どもの頃の寄席通いの思い出とともに、吉本の寄席運営について、次のように語っている。

私が寄席通いを始めたころのホームグラウンドともいべき寄席は、ミナミの法善寺の花月と、キタの永楽町の花月倶楽部だった。昭和初頭のことである。

当時、隆盛を極めていた吉本興行(戦後は吉本興業)の方針としては、後に生まれたナンバの花月劇場は、漫才、軽演劇、ミュージカル・ショーといった、いわゆるボードビル劇場として徹し、前記の南北の花月はあくまで現在でいう名人会的な小屋としていた。これは、南北花月の入場料が一円のと看、他の漫才の専門館が、一〇銭か二〇銭であったことから、この二館の格、内容、共に高かったことがうかがえるだろう。吉本では、はっきりと、この二館以外は、安く盛り沢山に漫才を勤労者階級に提供するという、割りきりをつけていたのである。

この二館だけは、当時、東京交代連という名称で、東京の芸人の出演があり、それだけに東西の名人芸が鎬を削るぶつかり合いも見ものだったのである。吉本の幹部は一〇銭の小屋で有望株をみつけると、ちゅうちょなく南北花月に登用してやるというシステムを組み、芸人にとってはこの二館こそ、あこがれのメッカ、ひのき舞台であったわけだ。

39

香川が回想しているように、決して吉本は新しい客層の方ばかりを向いていたわけではない。大阪に古くからいる落語や講談などの演芸ファンを大切にしながらも、マイナーな芸能や芸人を「あこがれのメッカ、ひのき舞台」に登用することで、メジャーに格上げし、その興行価値をより高めていったのである。

IV. 落語の新しい見せ方

よく一般論として、吉本は落語に冷淡であったとか、上方落語を滅亡の淵へと導いた

は平取アイヌ酋長が世伝の珍什……出演アイヌは男女十数名……見よ！稀に行ふ……勇敢なる原始民族が叫ぶ悲にして壮なる熊狩の凱旋式とも称すべき此古典的の熊祭りを」と記載されている。

³⁸ 樋口保美「『萬歳』の時代」(『藝能懇話』第13号、2001年)。

³⁹ 香川登枝緒『大阪の笑芸人』(晶文社、1977年)。

のは吉本（林正之助）であったとか、吉本の落語に対する姿勢は、批判的に語られることが多いが、実際にその歴史を繙いてみると、そうとばかりも言えない。もちろん、そのような反感を買う要因が、吉本にまったくなかったと言え、嘘になる。だが、落語が有していた地盤や聴衆の動員力を、新しい時代になんとか適応させようと、吉本が努力を重ねていたことも忘れてはならない。

たとえば、1916年10月1日に法善寺花月亭で開催された「一五会」という落語会がある。これは三友派が紅梅亭で催していた「日曜会」に対抗するために作られた会で、毎月1日と15日の正午より「落語革新の目的」⁴⁰で開かれたことから、京桂派が行っていた勉強会の名称をそのまま引き継ぎ、一五会と名づけられた。東京の落語研究会と同様に、たっぷりと時間をかけて、きちんとした落語を演じるというのが、一五会の趣旨である。1922年11月15日には、正午から南地花月亭で「第一回大阪落語保存会」という会が開かれているが、この会については、よくわからない。だが、1931年（昭和6年）に同名の「大阪落語保存会」が結成され、翌年の9月18日には、落語花月連主催による「第一回落語研究会」が北新地花月倶楽部で開催されている。吉本は伝統的な落語の継承・保存にも力を注いでいたのである。

また、先に引いた文章のなかで香川登枝緒が述べているように、吉本は東京から多くの芸人を招いていたが、そこには落語や講談の価値を大阪の人々に再発見させようという目論見があったのではないだろうか。1919年4月1日からのビラには「偕此たびは東京表より交代連としてお目先の変わりしもの多数を迎へ従来の幹部連と共に互ひに鎬を削る烈しき懸命の舞台振りを春宵一刻千金の頃より相はじめ申します」⁴¹と記されている。その後も、二代目談州楼燕枝や政治講談の伊藤痴遊、六代目春風亭柳枝、春風亭華柳（四代目柳枝）、五代目柳亭左楽、八代目桂文楽、三代目神田伯山など、錚々たる東京の落語家、講談師が吉本の高座に上がっている。1923年2月には、初代三遊亭円右と三代目柳家小さんが揃って花月各席に出演、「この両大家を同時に迎え得た吉本の得意や思うべし」、「いつもは嘶そっちのけでおしゃべりに忙しい花柳界の御婦人方も、すっかり聞きほれ、聴衆は皆大満足であった」⁴²という。16日付の『大阪朝日新聞』にも、「吉本興行部の努力は遂に二名人の来阪を促し、茲に御同好各位に平素の御愛顧に酬ゆる事とせり」、「滞阪期短し！ 是非此機に！」との広告が載せられている。東京の名人上手たちを大阪の寄席に出演させることで、吉本は大阪の落語家や講談師たちの奮起を促すとともに、大阪人に落語や講談の魅力を改めて伝えようとしたのである。

さらに、1922年11月1日から10日にかけて、第一回舌戦得点会が開催されている。舌戦得点会とは、寄席にきた客に投票用紙を渡して、いちばん良かったと思う落語家の名前を書いてもらい、それを場内備えつけの投票箱へ入れる。毎夜終演後、舞台上にて開票し、10日間で誰がいちばん票を得たのかを競うという趣向である。この試みは大成功し、大いに人気を呼ぶこととなった。このときのビラを見てみよう。

御願ひ 若手新進の落語家の中から……未来の大家を建設して下さい

⁴⁰ 『大阪朝日新聞』1916年10月1日付。

⁴¹ 『藝能懇話』第18号（2007年）所収。

⁴² 『演芸タイムス』第10号（1923年2月）。

「建設」…「改造」…と…か総て世の中は変つて参りました。何時も変り栄へも致しませんのが吾々社会で……と相変らずお若輩の御話でお茶を濁して計り居つては御贔屓様に見放される……と自覚致しました。己れに眼醒ますと同時に自分の歩んで行く可き道に気が付きました……。サア……そこで御願ひ致し度いのです。

御入場料金四十銭 御声援の鞭撻と御指導の道しるべ 此意味で左記演者の技芸得点競技を催します。

投票に抛り御批判を待つ六撰人 桂扇枝 立花家花橘 桂塩鯛 桂文治郎 笑福亭枝鶴 橘家勝太郎⁴³

「若手新進の落語家の中から……未来の大家を建設して下さい」というのは、吉本の偽らざる本音だったのではないだろうか。11月10日の『大阪毎日新聞』には、「連夜満員御礼申上候／指導奨励 舌戦得点会／会場狭隘にて定員に限り有之、満員の際は入場を御断り致す場合有之候間、可成早々の御入場を希望致候」との広告があり、人気のほどが知れる。この舌戦得点会は大好評であったため、ただちに11日より第二回舌戦得点会が北新地花月倶楽部で開催された。このときには、企画を後援した大阪日日新聞社が、寄席での投票とは別に、購読者による葉書での人気投票を行っている。このように、吉本は自社媒体だけでなく、新聞社と連携しての話題づくりや、公開の場で芸人を競わせて、腕を磨かせるなど、落語の見せ方にもさまざまな工夫を凝らしていたのである。

そして、『吉本興業百五年史』によれば、1926年には、三味線太鼓に洋楽器を加えて、和洋合奏の出囃子を採用したという。舞台に初めてマイクを置いたのも、この年であった。また、二代目林家染丸が「見台を置くとやりよいのですけれども吉本の方からはとれとれといはれます」⁴⁴と証言しているように、落語家に見台を使わせないことで、より身振りの大きい派手な演出を心がけるように促してもいた⁴⁵。尾上二平は、この時代の上落語の変化について、次のように述べている。

それから出の囃子、即ち落語家が楽屋から舞台に出て来る時の囃子も当今は余程変つて来た、以前は赤猫、四丁目、おそづけ、勧進帳の合の手、舟行き（俗に円馬ばやし）其他を用ひて居るが、近頃は故春団治などは野崎の合の手で出て来た、其他ピアノの合方が出る人もあるやうな事になつて来た。

前方は大阪の落語家に限つて必ず小さな机を前を置いてカタカタやつたものだったが、現在では前座は兎も角これを使ふ人は甚だ稀で枝鶴を除いては殆ど皆が皆まで東京の落語家のやうにカタカタなしで素噺しをやるやうな傾向になつた。⁴⁶

⁴³ 『藝能懇話』第8号（1994年）所収。

⁴⁴ 「郷土趣味 大阪落語の會」（『大阪人』1930年3月号）。

⁴⁵ 桂米朝は見台について、「あれ〔見台〕、ないほうが、芸が大きくなるような気がするんですわ。あれがあると、なにか、あれを中心に空間が形成されるような気がして、つまり空間が限定されるんですかな、なかったらツツと伸びてゆくような、そういう気がするの、それからあんまり使わなくなったんですがね（〔〕内引用者）」（越智治雄・桂米朝「桂米朝師に聞く 落語・東と西」、『国文学 解釈と教材の研究』第18巻第4号、1973年3月）と述べている。

⁴⁶ 尾上二平「大阪落語の今昔（二）」（『上方』第48号、1934年12月）。

花菱アチャコも「それを林会長が工夫して南の花月で初めて洋楽器も加えて和洋合奏の出囃子を試みはったのだす。落語も万歳も和洋合奏の賑やかな出囃子に乗って高座へ出るようになり、この新機軸で高座がいつそう引き立つようになりましてん」⁴⁷と語っている。出囃子に洋楽器を採用したり、見台の使用を禁じることで、より賑やかな演出を試みたりと、吉本としても落語の魅力を新しい時代に適応させるべく、さまざまな挑戦を積極的に行っていたのである。

さいごに

以上、1912年の創業から1922年の「花月派三友派大合同」までの10年間を中心に、吉本がいかにして演芸王国の基礎を確立するに至ったのか、その興行(戦略)について、寄席・芸人・その他にわけて考察を加えてきた。吉本がたった10年のあいだで関西の演芸界を制覇したという事実は、藤原重助や金沢利助ら明治前半期に大阪の興行界で力を持っていた人々が、あるいは亡くなり、あるいは興行から遠ざかっていったなどの理由があったとはいえ、まさに驚くべきことである。しかし、より重要なのは、当時の吉本が、劇場運営やタレントマネジメント、ライブ・テレビ番組制作、官公庁・企業のプロモーション、クロスメディア戦略など、現在の吉本興業が手がけている事業の基盤を、すでに構築し始めていたことではないだろうか。この後も、吉本はその土台をさらに盤石なものとしつつ、さまざまな事業へと乗り出していくことになるのである。

⁴⁷ 長沖一『上方笑芸見聞録』(九藝出版、1978年)。

参考文献 ※本文及び脚注で挙げた文献は除く

- 秋田実、『大阪笑話史』、編集工房ノア、1984年
宇井無愁、『上方落語考』、青蛙房、1965年
大阪藝能懇話会、『芸能懇話』、大阪藝能懇話会、1989-2016年
大阪ことばの会、『大阪弁』、清文堂書店、1948年-1951年
大阪市教育部共同研究会、『大正大阪風土記』、大正大阪風土記刊行会、1926年
大阪都市協会、『大大阪』、大阪都市協会、1925年-1942年
大阪府立上方演芸資料館、『上方演芸大全』、創元社、2008年
桂米朝、『三集・上方落語ノート』、青蛙房、1991年
桂米朝、『一芸一談』、淡交社、1991年
上方郷土研究会、『上方』、上方郷土研究会、1931年-1944年
上方芸能編集部、『上方芸能』、上方芸能編集部、1968-2016年
小谷洋介、『吉本興業をキラキラにした男 林弘高物語』、KKロングセラーズ、2017年
権田保之助、『民衆娯楽問題』、同人社書店、1921年
権田保之助、『娯楽業者の群』、実業之日本社、1923年
斎藤忠市郎「明治大正昭和落語史」、『名人名演落語全集』、立風書房、1981-1982年
笹山敬輔、『興行師列伝 愛と裏切りの近代芸能史』、新潮社、2020年
澤田隆治、『決定版 上方芸能列伝』、筑摩書房、2007年
竹中功、『吉本興業史』、KADOKAWA、2020年
竹本浩三、『笑売人・林正之助伝 吉本興業を創った男』、大阪新聞社、1997年
暉峻康隆、『落語の年輪』、講談社、1978年
花菱アチャコ、『遊芸稼人 アチャコ泣き笑い半世紀』、アート出版、1970年
富士正晴、『桂春団治』、河出書房、1967年
富士正晴記念館「富士正晴記念館所蔵演芸関係写真目録（富士正晴資料整理報告書 第7集）」、富士正晴記念館、1999年
富士正晴記念館「富士正晴記念館所蔵寄席番組類目録（富士正晴資料整理報告書 第8集）」、富士正晴記念館、2000年
堀江誠二、『吉本興業の研究』、PHP 研究所、1987年
前田勇、『上方落語の歴史 改訂増補版』、杉本書店、1966年
前田勇、『上方演芸辞典』、東京堂出版、1966年
増田晶文、『吉本興業の正体』、草思社、2007年
南博、社会心理研究所、『大正文化 1905-1927』、勁草書房、1987年
矢野誠一、『女興行師吉本せい 浪花演藝史譚』、中央公論社、1987年
吉本興業株式会社、『吉本八十年の歩み』、吉本興業、1992年
吉本興業合名会社『ヨシモト 復刻版』、吉本興業、1996年
吉本興行部、『笑賣往來 復刻版』、吉本興業、1999年
話術倶楽部出版部、『痴遊雑誌 複製版』、柏書房、1981年

丸屋竹山人、『上方落語史料集成』、<http://blog.livedoor.jp/bunnzaemon/>（最終閲覧

日 : 2022 年 2 月 3 日)